

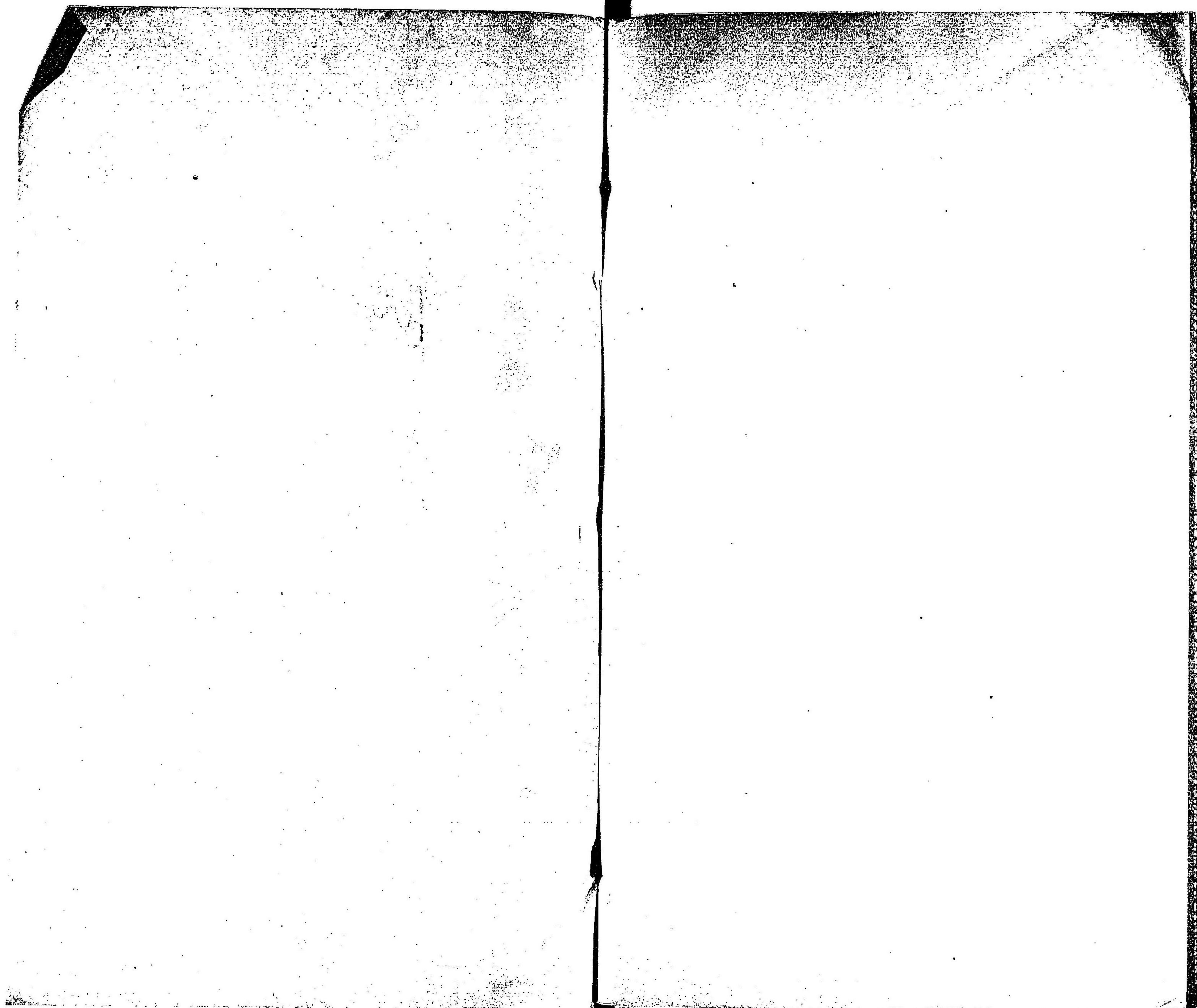
特44

86



265

109



法
中
傳
音
息
緒

傳

明治
43. 6. 27
内交

己酉初夏

柳江題



芳流閣

玉蘭作



嗚呼憐むべし大塚信乃は

親の遺言紀念の名刀

心に占めつ身に傳けり

艱苦の中に年を経て

得がたき時を得てふは

はるぐ瀕我(齋)て

名を揚げ家を興すべし

その福はわざはひと

ふりかはりたる村雨の

刀は舊の物ならうて

今や我身をを臂力かむ

豊となりてぞ憾なる

左れば當座の辱を

避けなむものごと大塚信乃

夥多の圍を切り開き

芳流閣の頂上に

輒く攀ぢちつ登れども

脱れ去るべき途もなく

如何かばせんと躊躇ひつ

一は息をば休めたり

時しも頃は六月二十日

きのふもけふも乾蒸の

燄熱をわたる敷瓦

凸凹隙なく波濤に似て

下には大河滔々と

こゝ生死の海に入る

溯洄は名に負ふ坂東太郎

水際の舟楫絶いて

進退こゝに谷まねり

折れ俄の捕手承はる

犬飼現八唯ひとり

身を霞ませて登りつゝ

一層二層三層と

梢を傳ふ鼯鼠の

狂ふが如く攀ち来り

御誕さうと呼掛け

拿たる十手閃かり

急遽に信乃に寄近き

組まへすれど寄せ附けず

込に隙を窺ひつゝ

疾視あふてまたる形勢

浮圖の上なる鶴の巢を

太蛇のねらふにさる似たり

廣庭に控たる成氏を始めて

警固の武士ごと堅唾を呑み

手に汗握り見詰めるが

如何なる隙かありつらむ

信乃が切込む太刀風に

發石と受留む十手の電

ふつる覺を踏み駐めて

一上一下虚々實々

寄せては返す太刀音被聲

兩虎深山に挑むとき

鋒然と一して風發り

二龍青潭に戦ふ時

沛然と一して雲起る外

斯やとばかり恠まる

天に聳る高閣の

棟に穿ふ未曾有の晴業

足場を掃り撓ます去らす

疊みかき撃たる太刀を

現八右手に受け流し

返す拳に附け入りつ

ヤツと被けたる聲諸共

眉間を望んでハタと打ち

十手を丁と受け留る

信乃が及は鏝際より

あはれホツキと折れたれば

現八得たりと無事と組む

互に利腕確と拿り

捻ぢ倒さむと聲合せ

揉みつ揉るゝ力足

此彼齊しく踏みこり

河邊の方へ覆車の俵

坂より落るに異ならず

高低險しき豊の勢

止るべうもあらざれば

幾十尋なる屋の上より

未遙なる河水の

底には入らぐて程もよ

氷際に撃げる小舟の中へ

累の合ひつ落ちたりける

傾く舷と立つ浪に

ザンブと音す氷烟

纜丁と張り断りて

射る矢の如き早川の

真直中へ押出され

一か此追風と虚潮に

誘ふ水なる泪り舟

往方も一舟なりにはり

明治四十三年六月十日印刷

全 四十三年六月二十五日發行

編輯人兼

有村彌四郎
大阪市東區和泉町二丁目一番地

印刷人

藤井護三郎
大阪市東區和泉町二丁目一番地
電話東四五五九番

發行所兼

藤井改進堂
大阪市東區和泉町二丁目一番地
長電話東二七〇番

265
109

